編集後記

『親鸞教学』第九一号をお届けします。今号も発刊が遅れましたことをお詫び申し上げます。

巻頭には延塚知道教授の「宿業の身が開く願心荘厳の浄土」と題する論考を掲載しました。世親の『浄土論』に説かれる浄土の二十九種荘厳功徳について、親鸞が九つの功徳に注目することを踏まえ、特にその中の清浄功徳と量功徳のもつ意義について述べられています。

井上尚実専任講師の「「ただ念仏」の原型―『スッタニパータ』「彼岸道品」に謳われる念仏と信心」は、『スッタニパータ』に見られる釈尊とバラモンの求道者との問答に「ただ念仏」の原型が見られることを指摘するとともに、仏教研究の在り方についても尋ねられています。

西本祐攝助教の「石水期・清沢満之における「現生正定聚論」の究明（上）―清沢満之における「現在安住」の思想的背景―」は、「在床懺悔録」における清沢の親鸞思想の考究に重きを置き、清沢が親鸞の「現生正定聚」をどのように了解していたかについて考察されています。

任期制助教の斉藤研氏からは「坂東本『教行信証』「信巻」〝序前の文〟試論」を寄せていただきました。「信巻」別序に先立って、なぜ『涅槃経』の文が置かれているのかについて、特に「国王意識」という人間の問題を通して述べられています。

本学研修員の森剛史氏には「近代初頭の真俗二諦論とその歴史的課題」と題して日頃の研究の成果を発表いただきました。明治期における本願寺教団の真俗二諦論について述べた上で、清沢満之の二諦論の独自性を尋ね、真宗における道徳の問題について考察がなされています。

以上の論文に加え、安田理深先生の講義「入出二門の源泉」の筆録から「仏法不思議」の題で掲載いたしました。

昨年十月二十四日に、当学会に対し深い学恩を頂戴した細川行信先生がご逝去になられました。生涯を通して真宗教学史のご研究に取り組まれ、沢山の著書を世に問われました。学恩に対して心より感謝申し上げますとともに、謹んで哀悼の意を表します。

仏教が人間の苦悩を見つめ、時代の変遷とともに歩み続けてきたことを思う時、真宗の学びも現代の中で明らかな表現を取る必要がある。そして、改めて先人の遺された言葉に触れるとき、どの時代も「現代」であったことが思われる。気をつけておかねばならないのは、現代に向き合い、現代に応答しているつもりで、実は時代に流されているだけになっていくという学びの姿勢である。

かつて安田理深先生は曽我先生の思索を「赤表紙と新聞」（安田理深選集補巻）と押えられた。赤表紙とは聖教を指し、新聞とは現実の問題を指しているが、変わることのない真理と人間の現実の間を歩み続けられたのが曽我先生の思索であることを述べられたのである。そして、「現代教学は現代化された教学というのではない、現代的人間をして本来的自己を恢復せしめるという意味である」と言われる。現代的な装いを整えるのではなく、現代の問題を明らかにする真宗の根本課題を尋ねることの重要さを痛感している。

（文責　一楽）